

ユニット1 ワークショップ 宗教とジェンダーの最前線IV

開催日時：2021 年 10 月 16 日（土）13:00-15:30

会場：zoom ウェビナー

参加者人数：約 80 人

■プログラム：

挨拶：岩田真美（龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター長）

斎藤喬（南山宗教文化研究所第一種研究所員）

清水耕介（龍谷大学ジェンダーと宗教センター・ユニット1 リーダー）

司会・趣旨説明：小林奈央子（愛知学院大学、南山宗教文化研究所）

発表1 「日本聖公会における女性の司祭按手実現とジェンダーの変遷」

三木メイ（同志社大学）

コメンテータ：Eun Ja Lee（イ ウンジャ）（関西学院大学）

発表2 「沖縄の女性祭司—村落における就任と承認」

澤井真代（立正大学）

コメンテータ：後藤晴子（南山宗教文化研究所）

総合討議

総括：川橋範子（国際日本文化研究センター、南山宗教文化研究所）

【報告のポイント】

2018 年以来、南山宗教文化研究所がプロデュースしてきた「宗教とジェンダーの最前線」のシリーズを、昨年度に引き続き当センターとの共催で開催した。4 回目となる今回は、三木メイ氏が日本聖公会における女性司祭について、澤井真代氏が沖縄の女性祭司についてそれぞれ発表。イ ウンジャ氏、後藤晴子氏のコメントのほか、フロアからの質問にも応じつつ、活発な意見交換の場となった。

【報告の概要】

コロナ禍にともなう感染防止のため、本研究会はオンラインで開催された。三木氏、澤井氏の発表に対し、イ氏、後藤晴子氏がそれぞれコメント。司会は小林奈央子氏が担当した。報告内容は以下の通りである。

三木氏は、日本聖公会の聖職制度におけるジェンダーの改変の経緯の紹介、その要件となった事柄の考察、さらにその後のジェンダー状況の変化と、今後の課題について発表した。

女性の司祭按手実現を世界規模で見た場合、最初の実現は、1944 年の香港である。しかし、その報告を受けたカンタベリー大主教はこの承認を拒否。女性は司祭職を辞任した。その後女性の司祭按手についての議論は、長らく進展を見せなかったが、1971 年の香港教区にて2名の女性司祭が誕生した。その後、世界各国で次々と聖公会諸管区が、女性司祭を認可した。

一方、日本聖公会における女性の司祭実現への変遷については、1990 年 5 月の管区総会

に、女性司祭実現を促進する委員会設置ための議案、および管区の委員に女性を複数選出するための議案を、「正義と平和委員会」他6つの委員会から提出され、一部修正されて可決した。これにより、ようやく公的に議論、検討作業が始まることになった。また、アメリカ聖公会初の女性主教との来日(1990)やイギリス聖公会総会での女性司祭実現の議案可決(1992)なども、日本聖公会における女性司祭実現のための草の根運動を支えた。しかし、これらの諸要素の影響を受けてもなお、日本聖公会における女性司祭実現(1998)まで更なる年数を要した。

女性の司祭按手は、世界の聖公会の動向、草の根の女性たちの運動、海外の聖公会の女性聖職者たちの励まし、国内の男性聖職・信徒の協力、委員会設置による公的な検討作業と議論の促進、フェミニスト神学の影響など、複合的な要因によって、変革の扉を開くことができた。しかし、他国の聖公会よりも大幅に実現が遅れたのには、憂慮すべき明白な理由があった。聖職代議員と信徒代議員の賛成票が多数となっても、主教議員の反対票で否決されるケースが続いたからである。女性の聖職の増加と女性参画の推進は、各教区それぞれの「風土」によって格差がある。それをどう変革していけるかが今後のジェンダー課題の一つであると発表した。

これに対し、イ氏からは複数のコメントが三木氏に寄せられた。「日本聖公会で女性司祭が増加することで良い面と悪い面は何か」、「今後も女性司祭を増加させていくためには、聖公会における女性の意識改革だけではなく、男性の意識改革も必要であると思うがどうか」など質問した。前者の質問について、三木氏は、「女性司祭の増加は女権の増長運動の一環ではなく、聖職と信徒が同じ立場で協働することを目指すものである」とリプライ。後者については、「女性にしても意識してフェミニスト神学を学ばなければならない、聖公会における男性中心的傾向は現在も否めないところではあるが、それでもここ20年ほどで変化は感じられている」と答えた。

次いで澤井氏は、沖縄の八重山諸島石垣島川平の女性祭司への調査から、一女性が女性祭司として村落の中で宗教上の中核的役割を果たすようになる過程として、女性祭司の選出と就任儀礼、女性祭司の職務の中心にある神への祈願のことばの習得、周囲の人びとが女性祭司の霊性をみとめる契機と過程について発表した。

沖縄の中での地域差は大きい、川平の場合は、女性祭司の就任の条件として、霊的資質の豊かさは必須ではなく、あくまで公的手続きを経て選ばれた女性が、ツカサとしての生活を送り、職務を果たしていく。その過程で、ツカサは所々で神からの働きかけを感じ取り、また周囲の人びとも、村落の中で最も神に近い存在として、ツカサをまなざすようになる。その背景には、もともとは神や祭祀とほとんど無関係に生活していた女性をも、神への認識を涵養するに至るツカサに育てていく、村落の制度としての、ツカサの習得すべき祈願の実践を、指摘することができるのではないだろうか。

さらに、こんにちの村落祭祀で祈願の中核を担う女性祭司は、琉球王国時代、国王の近親の女性が就任する「聞得大君」を頂点とする王国中の女性祭司組織に組み込まれていた。女性祭司の組織化は、女性祭司の霊性を統制下に置くことがねらいとされていたと指摘され、1609年の「摩の琉球入り」以後は王族の女性祭司の職が奪われていった経緯もあるが、形を変えながらも、沖縄では、女性が主導する祭祀が制度として行なわれ続け

た。川平において宗教上の中核的立場に立つ女性は、個人的のみで霊性を発揮しているというわけではなく、伝えられてきた宗教上の枠組みや制度において、神への認識を涵養してゆき、その過程を周囲の人びとも認識するというように、制度と女性と人びとの間の呼応が循環する中で、その役割を果たしている。このことが、琉球王国以来の沖縄の宗教制度とどのように関わるのか、また、広く女性に霊性をみとめる「ヲナリ神信仰」とどのように関わるのか、今後様々な点から検討する必要がある。

対して後藤氏からは、「沖縄の女性司祭の職務における対立や葛藤はあるか」、「沖縄戦や社会変動などが、女性祭祀や儀礼に与えた影響はあるか」などの質問が寄せられた。前者の質問に対して澤井氏は、「調査対象の川平では、女性司祭は祭祀儀礼の知識や経験の豊富さから男性を含む周囲から一目置かれる存在、ただ、女性司祭の葛藤の面については詳しく調査できていないので、今後の課題としたい」と返答。後者については、「沖縄本島は、沖縄戦により祭祀儀礼への影響が大きかったと聞いているが、八重山では地上戦が展開されなかったのもあり、戦時中は祭祀が中断されたものの、劇的な変化はなかった、ただ自分が調査し出した2000年代以降では祭祀の規模縮小が窺える」と返答した。

フロアからは「女性司祭の反対の理由は何か」、「長らく女性聖職が認められなかった神学的根拠として明白に述べられている理由は何かあったか」、「聖公会も長らく男性中心的な動きが続いていたわけだが、その中で性的虐待など隠されてきた部分はあるか」、「女性司祭の養成課程におけるジェンダー観/比はどのようになっているか、学校教育の機会はあるのか」、「司を支える存在は男性だけではなく、女性もいるか」、など、多数の質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。

総括の川橋範子氏は、沖縄の民族宗教と中央集権的な強固な教団を持つキリスト教の聖公会の比較を通して宗教史の中のジェンダーと宗教の結びつきの多様性を見る、というのが本ワークショップのねらいであったと指摘した。川橋氏は、沖縄研究に従事していた背景もあり、今後の澤井先生の研究には大いに期待したいと言及し、三木氏の発表に対しては、日本聖公会におけるフェミニスト神学の研究の多さには驚くものがある一方で、日本仏教界にはそのような活動がまだなく、このような活動をどのように形成していくかが私たちの今後の課題だと思っている。多くの男性宗教研究者の背後には、宗教教団が存在し、ジェンダーの視点からの宗教批判が困難な現状がある。これは言い換えれば、研究者と宗教教団は、共犯関係にあるといえる。そのような力関係に絡め取られることのない、GRRCと南山宗教文化研究所であり続けてほしいと心から願っている。宗教の組織力と象徴力が強大であるが故に、宗教をジェンダー平等に敏感なものに作り変える必要がある。それには、今回のワークショップのような多様な宗教現況からの学びが必要である。この一連の取り組みが達成された時に、宗教はグローバルなジェンダー正義を達成するための積極的な要因になる。このような問題意識を持って、今後も活動していきたいと締めくくった。

(文責 ジェンダーと宗教研究センター)